

すぐれた文化財は誇りと自信を与えてくれる

就任にあたって

文化庁長官 安 嶋 彌

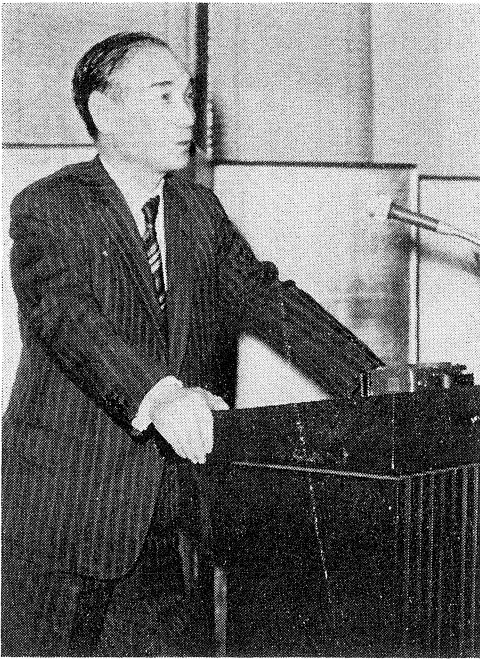
私は、七年ばかり前に、ケニアのナイロビに行きました。

東アフリカ大学の運営について視察するのが目的だったのですが、それは、この大学が当時ケニア、ウガンダ等三か国のいわば組合立の大学であり、その実情を見ることは、国連大学の日本誘致に何かの参考になるのではないかと考えたからです。

私は、外国に行きますと必ずナシ

ヨナル・ミュージアムを観ることにしています。大変効率的にその国の文化が理解できるからです。

で、ナイロビでも、ナシヨナル・ミュージアムを見ました。石器、土器、狩猟農耕の道具、昆虫やけだものの標本等を見て廻ったわけですが、急に明るいとこに出ました。これが出口だったのには、びっくりしました。というのは、石器や土器の次には彫刻、絵



画の陳列があるものばかり思っていたのですが、そういうものがなくて、突然、出口に来たからです。しかし、考えてみるとアフリカの新興独立国の多くは、石器や土器の時代とそう遠くない段階からいきなり現代に飛躍している

私の郷里の石川県に末松廃寺の跡があります。たまたま、その収蔵庫の落成式に出まして、あいさつをするこ

とになり、今申し上げたナイロビの話をしました。そして、つづけて、次のような話をしました。日本の文化は、大変ユニークなものであるとともに、きわめて水準の高いものであります。私共がこうした伝統を受け継いでいることは大変有難いことだと思えます。すぐれた文化財は、日本民族の文化の創造力について、間違いない一つの証拠を示しているものだと思います。そういう意味で、文化財は我々に大きな誇りと自信を与えてくれるものであります。末松廃寺収蔵庫の完成は、単に昔いいものがあつたということではなくて、そういうものをふまえた文化創造の契機であつてほしい。このように話した記憶があります。

伝統のある文化をふまえて、そして

そこに示された日本民族の文化創造能力に誇りと自信をもって、我々は今日に生きているわけでありますから、文化庁は、文化財の保護と同時に新しい文化の創造普及あるいは水準の向上に援助協力すべき立場にあると思います。先日来、インタービューで、しばしば、就任抱負を尋ねられました。ここでも話しましたように行政は連続するものであり、今・安達の両前長官以上の考えを私が持合せているわけでもありませんので前二代の長官が積み上げてこられた仕事を少しでも前向きに処理していきたいと願っております。

勿論、人が違いますから仕事の進め方は多少は違うかも知れませんが、与えられた行政課題が異なるはずはありません。私としては、永井大臣その他の方々の御指導を得ながら、このような態度で仕事をして行きたいと思えます。私は、非力であり、人間的にも未熟でありますが、皆様方の御協力御支援を得て、積極的に仕事を進めてまいりたい覚悟であります。よろしくお願い致します。

(昭和五十年九月十二日、文化庁職員を前にして行った長官就任あいさつ。文責編集部 写真はTNS通信提供)